

## 第2章 | 発達障害への理解

### 1 発達障害とは

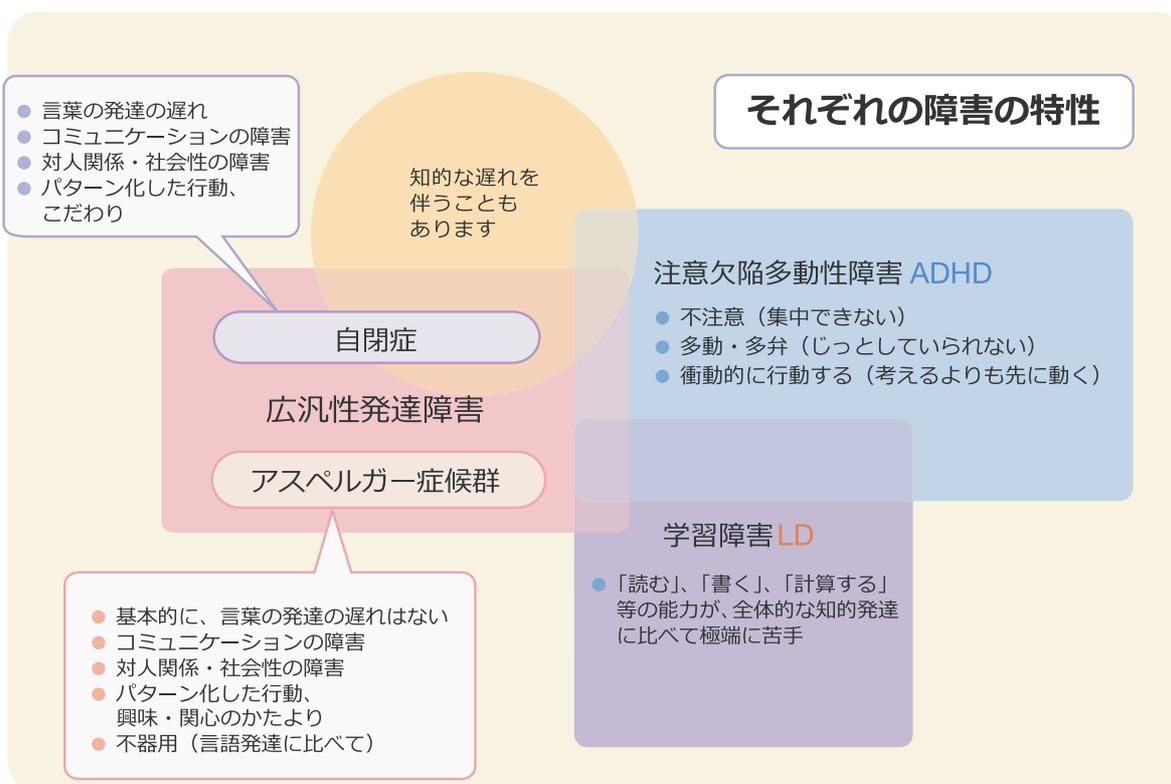
発達障害とは、自閉症、アスペルガー症候群などの広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥／多動性障害など、脳機能の障害であって、通常は低年齢において症状が発現する障害です。発達障害は、子どもにも大人にもみられます。

発達障害の人の中には、災害時のような突発的で予測のつかない状況、避難先のようなふだんとは違った状況では混乱を起こしやすい場合があるので、適切な支援が必要です。

発達障害の人には知的障害のある人もない人もいます。知的障害のない人も、コミュニケーションや対人関係の苦手さ、生活上の困難さがあるので、災害時には適切な支援が必要な場合があります。

発達障害の特性として以下の図のようなことがあげられます。

どんな能力にどの程度の障害があるのかは、人によって様々なので、その人の障害特性に合わせた支援の工夫が必要です。



厚生労働省作成「発達障害の理解のために」から引用

## 2 発達障害の人は、災害時にはこんなことで困っています

### 災害がおこったとき

- 危険がわからない
- 自発的に避難できない
- 困っていることが伝えられない
- パニックになる

### 背景にあること

想像することや見通しを持つことの苦手さ、コミュニケーションの苦手さ、変化に対する不安がとても強いという障害の特性が背景にあります。

想像することや見通しを持つことの苦手さがあるため災害の怖さや避難の必要性が理解できない、コミュニケーションの苦手さがあるため困っていることが伝えられない、変化に対する不安がとても強いいためパニックになる場合などがあります。

### 工夫の例

危険がわからない、自発的に避難ができないことに対しては、

- ◆ふだんから避難訓練を重ねて、災害時にどうすればよいかの見通しをもってもらう
- ◆具体的にすべき行動を簡潔なことばで伝える

などの工夫があります。

困っていることが伝えられないとは、例えば、ケガをしていることを伝えられない、尋ねてもオウム返しにしか答えてくれない、などがあります。視覚的な情報の方が理解しやすいという場合があります。

- ◆コミュニケーション支援ボード\*を使う
- ◆文字や絵に書いて伝える

などの工夫があります。



パニックになったときは、耳塞ぎをしたり、大声をあげるといったことがあります。

- ◆安全なところに連れて行き、落ち着くまで見守ることが大切です。本人自身、大変混乱しているので決して叱るというような対応はしないことが大切です。

## 避難するとき

- 避難指示に従えない
- 相手の話や説明がうまく理解できない

### 背景にあること

変化に対する不安が強い、決まったやり方へのこだわりが強い、コミュニケーションが苦手という障害の特性が背景にあります。

変化に対する不安が強い、決まったやり方へのこだわりが強いことから、ふだんしている日課やスケジュール通りに過ごそうとするために、避難指示をしても、指示に従えないという場合があります。

### 工夫の例

- ◆ふだんから避難訓練を重ねて、避難指示があった場合には、その指示に従っても安心できることを理解してもらう
- ◆目で見えてわかるスケジュールや予定を示すことで、視覚的に情報を伝えることでことばによるコミュニケーションの苦手さを補うなどの工夫があります。

## 避難生活、避難所で過ごすとき

- 避難所生活になじめない
- 避難所に入ることができない
- 相手の話や説明がうまく理解できない

たとえば、大勢に人がいる避難所の中で走り回ったり、大声をあげる、大声、大きな音に極端におびえる、子どもの泣き声などにパニックとなる、配給された食料が食べられないなどがあります。

避難所に入れないので、マイカーの中で過ごす場合もあります。

### 背景にあること

対人関係の困難さ、変化に対する不安が強い、感覚的な過敏さが強い（音や光、人の動きに過敏で混乱しやすい、偏食が強い）、コミュニケーションの苦手さなどの障害の特性が背景にあります。

## 工夫の例

- ◆ふだんよく遊んでいる本、おもちゃ、ゲームを避難所にもっていくことで、初めての環境でもふだんと同じような活動をして安心して過ごせるようにする
- ◆落ち着いて過ごせる場所（周囲の刺激が遮断された場所）を用意する（例として、福祉避難室の設置、福祉避難所の利用があげられます）
- ◆目で見えてわかるスケジュールや予定を示すことで、初めての場所がどんな場所で、何をするといいのかなかを理解してもらい、安心してもらうなどの工夫があります。

避難所に入れない方、強い偏食のある方には、

- ◆必要な物資の配給が受けられるような配慮が必要となります

## 背景にあること

相手の話や説明がうまく理解できないことの背景には、**コミュニケーションの苦手さ**があります。

## 工夫の例

- ◆コミュニケーション支援ボード\*を使う
  - ◆文字や絵に書いて伝える
  - ◆具体的な表現で伝える（視覚的にイメージできる表現が良いと言われています）
    - 例 食料の配給があるから行きましょう→今から避難所の入口で食べ物が配られますから、もらうために一緒に行きましょう
    - あそこのあれ取って→（指を指して）そこの机の上にあるボールペンを取ってください
  - ◆否定的な表現（だめ、違う、間違っている、おかしいなど）は使わず、できるだけ肯定的な表現を用いる
    - 例 そのやり方は違うよ→ダンボールの箱をつくるときは、（実際にやって見せながら）こんなふうにするといいよ
  - ◆命令的な表現や大声はできるだけ使わない
    - 例 ○○しなさい→○○してください、○○するといいですよ
- などの工夫があります

## 災害からしばらくたったとき

- 体調を崩す
- 行動面での問題が多くなる
- 生活リズムが乱れる

### 背景にあること

災害にあったことによるショック、災害によってあたり前に過ごしていた日常生活や集団生活が送れなくなったことによる混乱、慣れない生活環境での緊張、不安が背景にあると考えられます。

行動面での問題としては、夜寝ないで騒ぐ、落ち着きがなくなる、活動性が低下する、こだわりが強くなる、パニックを起こすことが増える、自傷行為がみられるなどがあります。

### 工夫の例

災害に対するショックやふだんとは異なった生活が続いていることによる混乱、緊張、不安が背景にあるということを支援する立場にある人は理解して対応することが大切です。

- ◆これまで過ごしていた集団生活にできるだけ早く戻す（幼稚園、保育所、学校、障害者通所事業所など）
- ◆毎日の日課の中で好きな活動で過ごす時間を設ける（例 決まった時間にボランティアと一緒に散歩に出かける）
- ◆避難所生活の中では、自由に過ごすことのできるスペースを設ける（例 福祉避難室など、ボランティアの見守りの中で、周囲の迷惑にならずに好きな活動をして過ごす場所がある）
- ◆支援する立場にある人が、本人の不安感やいらだちなどの気持ちや行動を共感的に理解してその気持ちや行動を言語化することで安心してもらう

また、恐怖や不安の感情は災害のあとではふつうに起こることで、何もおかしくないことを伝えてあげるようにします。

（例 「気分が落ち着かないんだね」「怖かったんだから眠れないんだね」「イライラするからじっと座ってられないのかな」など）

- ◆話を受容的に傾聴する

本人のこぼれ話を繰り返したり、気持ちを言語化したりするなどの形であいづちを打ちながら、話を聞いてあげるようにします

（例 「家がすごく揺れたんだよ」⇒「家がすごく揺れたんだね」、「津波が来るのが見えたんだ」⇒「それは怖かったね」）

などの対応があります。

\*コミュニケーション支援ボードについて

「コミュニケーション支援ボード」は、話し言葉によるコミュニケーションに苦手さのある知的障害や自閉症の人たちが使いやすいように工夫されたコミュニケーション支援のための道具です。



(コミュニケーション支援ボードの一部)

より詳しい情報については、公益財団法人 明治安田こころの健康財団のホームページ ([http://www.my-kokoro.jp/kokoro/communication\\_board/](http://www.my-kokoro.jp/kokoro/communication_board/)) をご参照ください。

## 参考資料

宮本信也 「障害のある子どもへの災害時対応の手引き 2012 版」 筑波大学

厚生労働省社会・援護局 障害保健福祉部 「発達障害の理解のために」

社団法人 日本自閉症協会 平成 24 年「自閉症の人たちのための防災・支援ハンドブックー自閉症のあなたと家族の方へー」

社団法人 日本自閉症協会 平成 24 年「自閉症の人たちのための防災・支援ハンドブックー支援する方へー」

国土交通省総合政策局安心生活政策課「知的障害、発達障害、精神障害のある方との コミュニケーションハンドブック」